

Ⅱ. ボランティア調査

新入生のボランティアに対する意識と経験の実態

— 2006年度明治学院大学「新入生ボランティア活動アンケート」から

1. 調査の趣旨、目的

明治学院大学ボランティアセンターでは、毎年4月の新入生オリエンテーション時にボランティアに関するアンケートを実施している。本学に入学した新入生のボランティアへの意識と経験の実態を調査することで、本センターの方針や活動内容を考えるデータとすること、また在校生アンケートとの比較を通して本学生が大学在籍中にどのように変化をしているのかを理解するデータとして活用することが目的である。本調査を通して、新入生たちはどのようなボランティア活動に取り組みたいと考えているのか、どのような理由でボランティア活動へ消極的な気持ちをもつのか、その実態の一端が明らかになる。調査結果は、さらに本センターでボランティア募集される方などにも公表し、学内外へ広く発信することで、本学生の入学時のボランティアに対する意識と実態への理解を深める資料として活用されることもねらいとしている。

2. 調査の枠組み

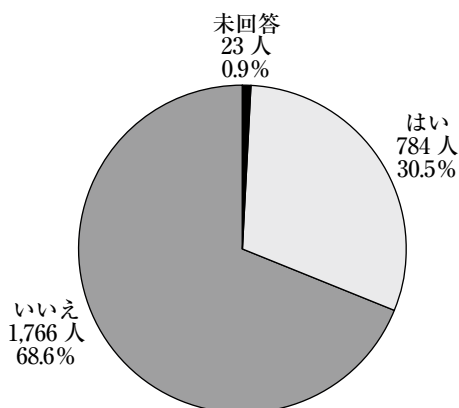
- ①調査対象者：明治学院大学 2006年度 1年生
- ②調査時期：2006年4月3日～8日
- ③調査方法：「新入生オリエンテーション」の際に「アンケート」用紙を配布しその場で回収をおこなった。
- ④回収の結果：総数 2,573名
文学部（英文学科 281名、フランス文学科 111名、芸術学科 120名）
経済学部（経済学科 234名、経営学科 177名、国際経営学科 129名）
社会学部（社会学科 223名、社会福祉学科 224名）
法学部（法律学科 294名、消費情報環境法学科 176名、政治学科 127名）
国際学部（国際学科 260名）
心理学部（心理学科 217名）
- ⑤調査方法：質問紙による調査
- ⑥調査項目：
 - * 大学入学以前に自発的にボランティア活動に参加したことがあるか。
 - * 大学時代にボランティア活動に参加したいと思うかとその理由、参加スタイル、ボランティア活動に参加したくない理由。
 - * どのようなボランティア活動に関心があるか。
 - * ボランティア活動を始めようとするときに、心配なこと。
 - * 明治学院大学にボランティアセンターがあることを知っていたか。

3. 調査の結果

(1) 大学入学以前のボランティア活動経験について

「大学入学前に自発的にボランティア活動に参加したことがありますか」【図1】に対して、「参加したことがある」という回答は30.5%であり、3分の1近くの学生が大学入学前にボランティア活動をおこなっているということが分かった。

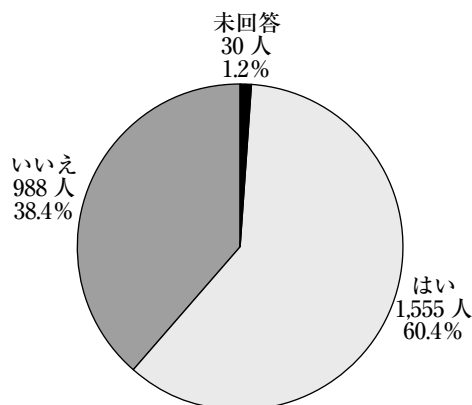
【図1】 大学入学前に自発的にボランティア活動に参加したことがありますか



(2) 大学時代にボランティア活動に参加したいか

「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」【図2】に対して、「はい」が60.4%「いいえ」が38.4%である。2005年との比較では、「はい」が2.7%減少している。この変化には、どのような背景があるか明確には分からないものの、「ボランティア活動に参加したくない理由」【図7】として「時間がない」が2005年より比べて4.2%上昇し、また「関心がない」が2%低下していることを重ね合わせると、ボランティア活動への興味や意欲が変化したのは、新入生が大学生活を忙しく時間がないと認識しているからであるとも考えられる。

【図2】 大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか



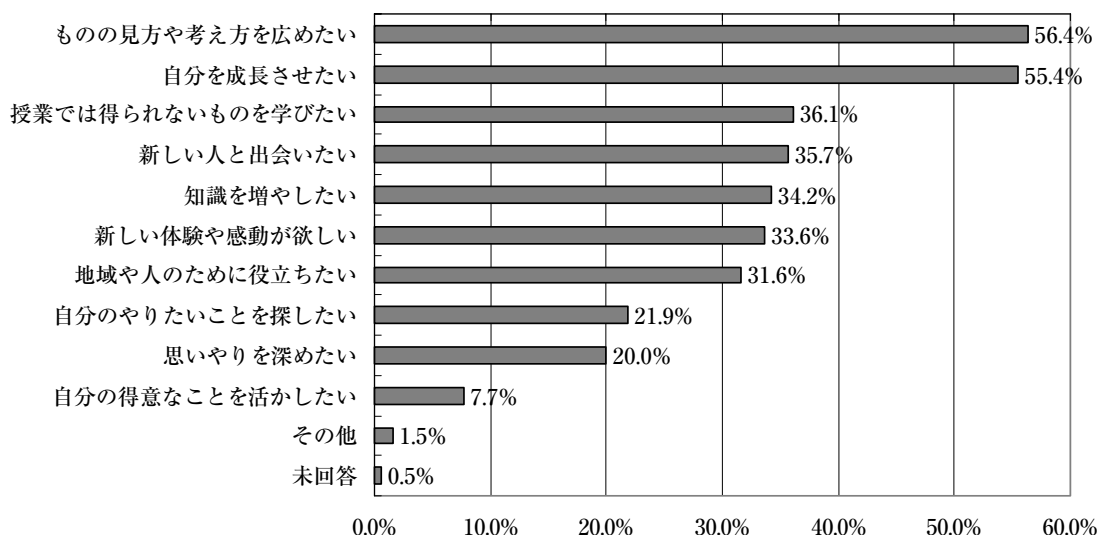
次に「ボランティア活動に参加したい」という回答を学科ごとに比較してみた。「参加したい」と回答した割合が高い順に表したのが【表1】である。まず、「参加したい」という回答の順番をみていくと、2005年と同様に社会福祉学科（89.7%）、国際学科（85.0%）が高い意欲を示している。そして心理学科（72.8%）、英文学科（68.7%）と続き、2005年度の心理学科と英文学科の順位と逆になっている。フランス文学科は、昨年は昇順で9位であったが今回は6位となり、また、芸術学科においても昇順で10位だったのが、今年度は7位と変化している。経営学科についても2005年では学科ごとの比較では最下位に位置していたが、今年度は、降順で5位になっており、2005年と比較して、ボランティア活動に高い参加意欲の学生が集まってきていることが分かる。一方、社会学科は2005年には昇順で6位に位置していたが、今年は8位にさがり、同様に経済学科も降順で5位だったのが12位に変化、法律学科は降順で6位だったのが、最も低い回答数となった。今年度新設された国際経営学科は、46.5%で昇順10位であった。次に「参加したい」と回答した割合が増えた学科は、国際学科が77.4%から85%となり、7.6%増加。同様にフランス文学科についても53.1%から63.1%と10%増加し、経営学科は40.6%から49.4%と8.8%増加した。一方、「ボランティア活動に参加したい」という回答が減った学科をみていくと、もっとも変化が大きかったのが法律学科であり、54.8%から39.5%に変化し、15.3%減っている。続いて、英文学科が75.8%から68.7%に変化して7.1%減。政治学科が73%から67.7%に変化し5.3%減。社会学科が60.7%から57%に変化して3.7%減少した。消費情報環境法学科が3.9%減、心理学科と社会福祉学科がそれぞれ1.5%減となっている。

【表1】 大学時代にボランティア活動に参加したいですか

学科	はい	芸術学科	58.7 %
社会福祉学科	89.7 %	社会学科	57.0 %
国際学科	85.0 %	経営学科	49.4 %
心理学科	72.8 %	国際経営学科	46.5 %
英文学科	68.7 %	消費情報環境法学科	44.9 %
政治学科	67.7 %	経済学科	44.9 %
フランス文学科	63.1 %	法律学科	39.5 %

「大学時代にボランティア活動に参加したい」という学生に対して、「ボランティア活動に参加したい理由（複数回答）」【図3】を尋ねた。理由としてあげられているものは、1位「ものの見方や考えを広めたい」(56.4%)、2位「自分を成長させたい」(55.4%)、3位「授業では得られないものを学びたい」(36.1%)、4位「新しい人と出会いたい」(35.7%)、5位「知識を増やしたい」(34.2%)、6位「新しい体験や感動が欲しい」(33.6%)となっている。日本学生支援機構の『学生ボランティア活動に関する調査報告書』（平成18年）では、ボランティア活動の動機を「自己実現型」と他者や社会のためにボランティア活動をおこなう「問題解決型」「キャリアづくり型」「癒しセラピー型」に類型化しているが、今回の調査結果で1位～5位の高位に位置する活動動機は「自己実現型」となっており、「地域や人のために役立ちたい」という「問題解決型」は、31.6%で6番目であることが分かった。

【図3】 ボランティア活動に参加したい理由（複数回答）

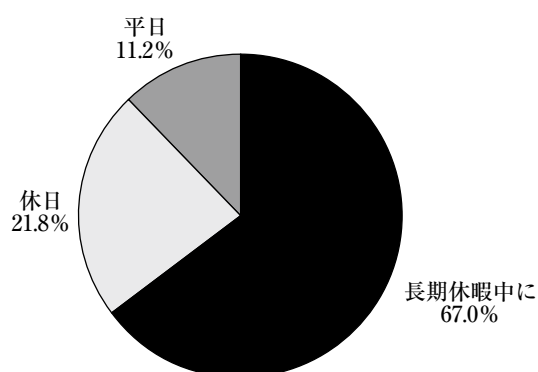


《自由記述》ボランティア活動をした理由（主なもの）

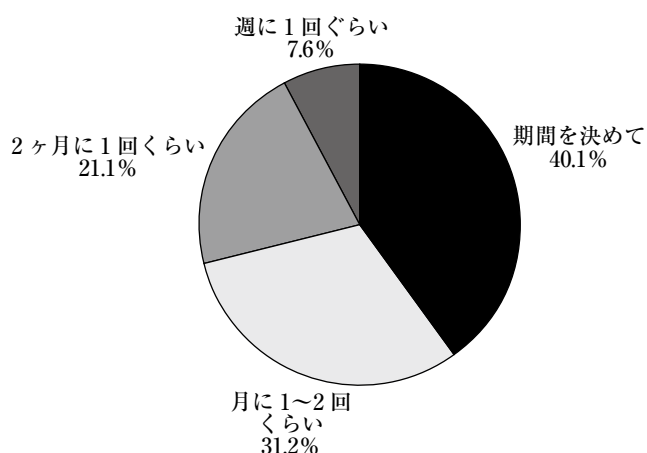
自分の持っている力を助けを求めている人に使いたい（英文）。自分でボランティアの団体を持っていて高校一年からやっています。今年からは会長として新たにプロデュースしています（仏文）。自分のためだけでなく、他人のために何かやってみた時に得る物を体験してみたい（経済）。就職（経済）。人の役に立てたら良いと思うから（経済）。自分がボーイスカウトなので続けてきたい（経済）。やりたいから（経済）。人と人との関わりを大切に、そこに生きがいを感じたい（経営）。やったことがないので、単純に興味がある（社会）。今までのことをこれからも続けたい（社会福祉）。外国人とボランティアを通じて交流したい（国際）。自分にできることがあれば、何でもしたい（国際）。人とたくさん話すことで、コミュニケーション力の向上を目指したい（国際）。

希望するボランティア活動のスタイルを尋ねた。活動日【図4】に関しては1位「長期休暇中に」(67.0%)、2位「休日」(21.8%)、3位「平日」(11.2%)であり、これは2005年と比較としてほとんど変化がみられない。活動の頻度【図5】に関しては1位「期間を決めて」(40.1%)、2位「月に1～2回」(31.2%)、3位「2ヶ月に1回」(21.1%)、4位「週に1回」(7.6%)という回答であった。週に1回というかなり高い頻度で活動への参加希望を表現している学生は、昨年より1%増え、1ヶ月に1～2回の参加希望をもつ学生も、3.4%上昇しており、一時的な体験としてボランティア活動に参加したいと希望する学生の割合が減少していた。活動内容【図6】としては1位「いろいろな活動に挑戦していきたい」(83.5%)、2位「一つの活動を続けていきたい」(15.5%)であり、これは昨年とほぼ同じ数値であった。

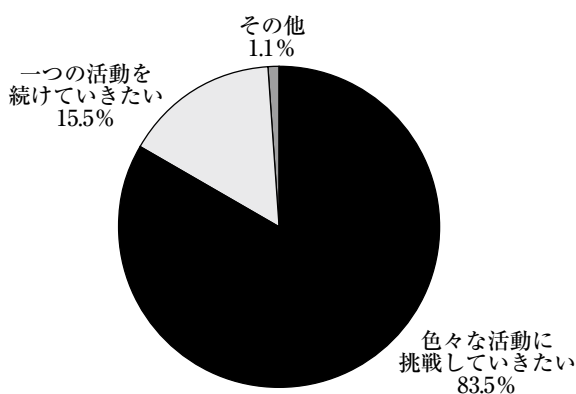
【図4】 活動日



【図5】 頻度



【図6】 内容

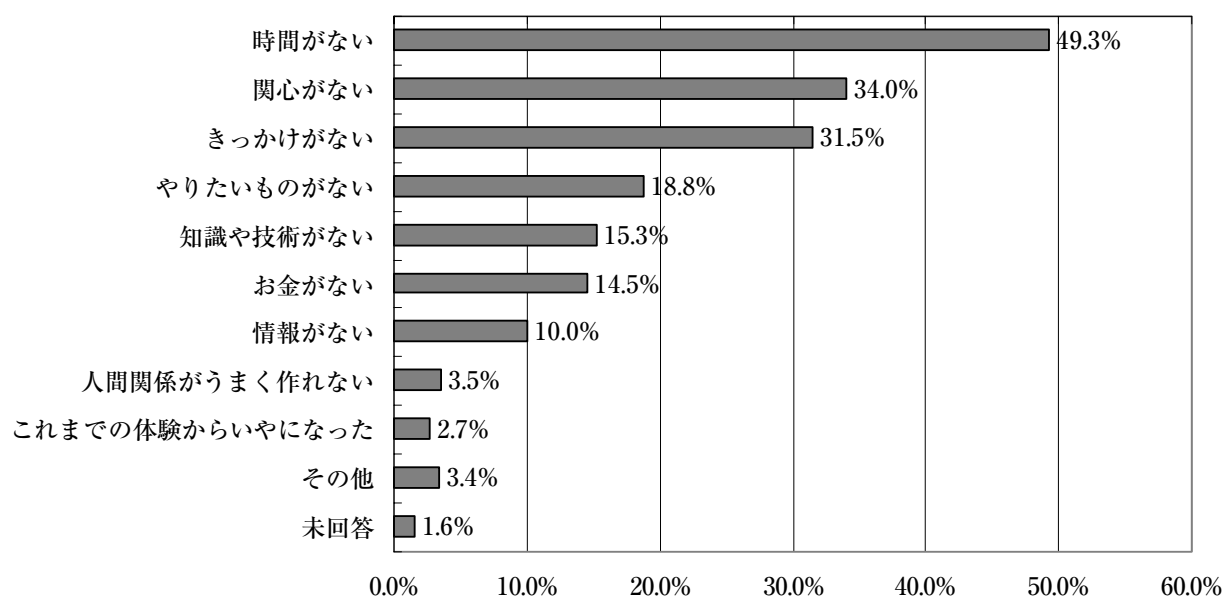


《自由記述》内容（主なもの）

興味のあるものを続けたい（社会）、自分にあうもの（経済）、海外で活動してみたい（英文）、人とふれあいたい（政治）、まだはっきりとしていない（心理）

一方、「大学時代にボランティア活動に参加したくない理由（複数回答）」【図7】を尋ねたところ、第1に「時間がない」（49.3%）という物理的な理由、第2に「関心がない」（34.0%）、第3に「きっかけがない」（31.5%）であり、続いて「やりたいものがない」（18.8%）、「知識や技術がない」（15.3%）、「お金がない」（14.5%）「情報がない」（10.0%）「人間関係がうまく作れない」（3.5%）「これまでの体験からいやになった」（2.7%）という回答であった。昨年の調査と比べて「時間がない」という回答が4.2%高くなり、逆に「関心がない」というポイントが2%低くなった。「これまでの体験からいやになった」と回答されたポイントは0.4%とわずかであるが高くなっており、大学入学前にボランティアをおこなった際にネガティブな感情を抱く経験をしていた状況がわかる。

【図7】 ボランティア活動に参加したくない理由（複数回答）



《自由記述》ボランティア活動に参加したくない理由（主なもの）

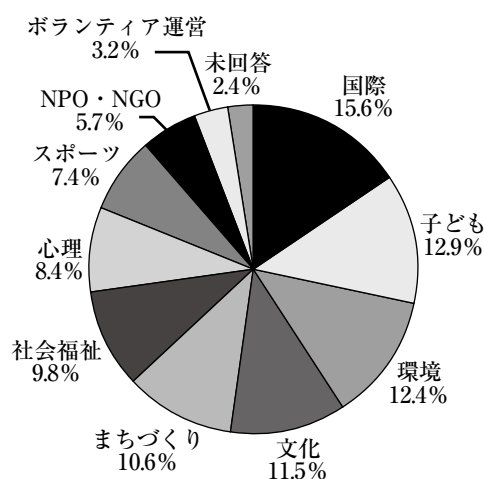
それ以上に自分自身でやりたいことがある（英文）。集団でやるべきことではない（仏文）。めんどくさい（芸術）。どのようなものがあるかまだ知らないので、情報を得て検討（芸術）。大学時代でなくその後やるきっかけがあればやりたい（経済）。余裕がない（経済）。自分がまずやるべきことをやろうと思うから（経営）。サークルやバイトをやりたいから（経営）。部活との両立が大変そうだから（経営）。自己の利にならないことが多い（多かった）。学校まで遠いから（芸術）。何かの団体を通しておこなうのは多少なりとも利害関係が発生してしまうから（心理）。誘われたらやるが、一人では参加しにくい（心理）。

(3) 関心があるボランティア活動について

「関心があるボランティア活動分野」（複数回答）【図8】を尋ねたところ、「国際」（15.6%）が一番多くの関心を集めており、「子ども」（12.9%）、「環境」（12.4%）、「文化」（11.5%）、「まちづくり」（10.6%）、「社会福祉」（9.8%）、「心理」（8.4%）、「スポーツ」（7.4%）、「NPO・NGO 運営」（5.7%）、「ボランティア運営」（3.2%）となっているが、これは昨年と全く同じ傾向であり本学生が関心をもつボランティアの活動分野の傾向として、定着しつつあることがわかった。学生の各分野への関心をさらに細かく明らかにしたのが【表2】である。結果をみていくと、「国際」分野では「異文化交流」と「国際協力」に高い関心が向けられ、「子ども」分野では「保育園・赤ちゃん」と「放課後活動」に、「環境」分野では「動物保護」、「文化」分野では「音楽」、「まちづくり」分野では「祭り・イベント」、「社会福祉」分野では「障がい児・者」と「高齢者」、「心理」分野では「カウンセリング」と「フリースクール」、「スポーツ」分野では「スポーツ指導」と「大会運営」、「NPO・NGO 活動」では「企画・広報」に、「ボランティア運営」では「ボランティア運営」に関心が示されているように、学生たちは、各分野の中でもさらに細分化した活動希望をもっていることがわかった。

またそれらの傾向は【表3】のように学科ごとにことなり、英文学科やフランス文学科、国際学科、国際経営学科の学生が「国際」分野へのボランティアに関心をもち、心理学科の学生が「心理」分野、社会福祉学科の学生が「社会福祉」や「高齢者」へのボランティアに関心をもっているように、昨年同様に学科の専攻と関心のある分野には高い相関関係があった。

【図8】 どのようなボランティア活動に関心がありますか 全学科（複数回答）



【表 2】 各分野の内訳

* 「国際」と答えた人数を 100%とする (1,498 名)

		人数	割合
国際	異文化交流	979	65.4%
	国際協力	832	55.5%
	在日外国人	376	25.1%
	日本語サポート	345	23.0%
	通訳	265	17.7%
	翻訳	208	13.9%

* 「子ども」と答えた人数を 100%とする (1,234 名)

		人数	割合
子ども	保育園・赤ちゃん	736	59.6%
	放課後活動	646	52.4%
	キャンプ・宿泊行事	379	30.7%
	スクールボランティア	308	25.0%

* 「環境」と答えた人数を 100%とする (1,192 名)

		人数	割合
環境	動物保護	561	47.1%
	ゴミ・リサイクル	446	37.4%
	森林保護	437	36.7%
	地球温暖化	336	28.2%
	海・川・湖沼の保護	329	27.6%
	景観保全	190	15.9%
	農業	163	13.7%

* 「文化」と答えた人数を 100%とする (1,103 名)

		人数	割合
文化	音楽	683	61.9%
	映画	500	45.3%
	美術館・博物館	313	28.4%
	食	202	18.3%
	演劇	199	18.0%
	歴史	196	17.8%
	科学	35	3.2%

* 「まちづくり」と答えた人数を 100%とする (1,014 名)

		人数	割合
まちづくり	祭り・イベント	794	78.3%
	災害	237	23.4%
	町並み保全・地域おこし	174	17.2%

* 「社会福祉」と答えた人数を100%とする (940 名)

		人数	割合
社会福祉	障がい児・者	467	49.7%
	高齢者	432	46.0%
	病院	292	31.1%
	路上生活	103	11.0%
	セルフヘルプ	98	10.4%

* 「心理」と答えた人数を 100%とする (800 名)

		人数	割合
心理	カウンセリング	573	71.6%
	フリースクール	264	33.0%
	メンタルフレンド	233	29.1%

* 「スポーツ」と答えた人数を 100%とする (713 名)

		人数	割合
スポーツ	スポーツ指導	365	51.2%
	大会運営	333	46.7%
	競技サポート	258	36.2%

* 「NPO・NGO」と答えた人数を 100%とする (542 名)

		人数	割合
NPO・ NGO	企画・広報	260	48.0%
	事務補助	173	31.9%
	人材育成	135	24.9%
	政策提言	83	15.3%
	資金調達	75	13.8%
	ホームページ管理	71	13.1%

* 「ボランティア運営」と答えた人数を 100%とする (308 名)

		人数	割合
ボランティ ア運営	ボランティア運営	216	70.1%
	コーディネーター	126	40.9%

【表3】 学科別「関心のあるボランティア分野」（複数回答可）

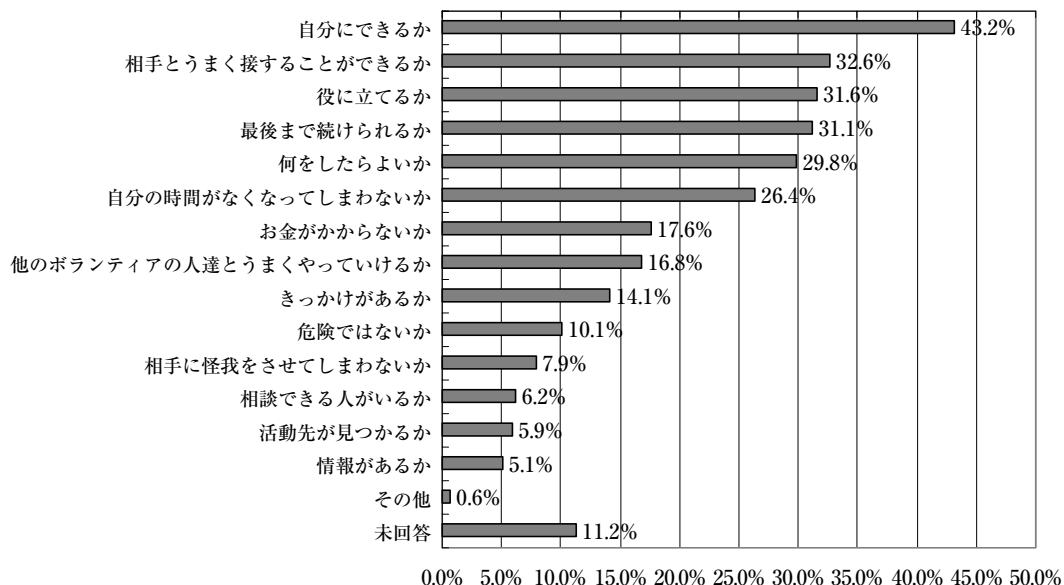
	1位		2位		3位	
英文学科	国際	21.0%	子ども	12.8%	文化	12.7%
フランス文学科	国際	16.2%	子ども	12.5%	文化	12.4%
芸術学科	文化	18.7%	国際	14.4%	環境	12.3%
経済学科	国際	15.2%	環境	13.8%	町づくり	11.9%
経営学科	子ども	14.7%	国際	13.0%	町づくり	12.5%
国際経営学科	国際	20.5%	文化	12.6%	環境	11.7%
社会学科	国際	14.2%	子ども	13.5%	町づくり	13.5%
社会福祉学科	社会福祉	19.6%	子ども	16.3%	環境	10.8%
法律学科	環境	13.7%	国際	13.4%	子ども	12.3%
政治学科	国際	16.0%	環境	12.8%	文化	11.5%
消費情報環境法学科	環境	14.6%	国際	14.4%	子ども	13.0%
国際学科	国際	23.3%	環境	14.1%	文化	11.4%
心理学科	心理	19.1%	子ども	16.1%	文化	11.9%

(4) ボランティア活動への心配

「ボランティア活動を始めようとするときに、主に心配なことは何ですか」【図9】という質問に対して、1番多い回答は「自分にできるか」(43.2%)、2番目が「相手とうまく接することができるか」(32.6%)、3番目が「役に立てるか」(31.6%)、4番目が「最後まで続けられるか」(31.1%)、5番目が「何をしたらよいか」(29.8%)、というように、学生自身がボランティアとしてうまく活動できるか心配していることがわかる。続いて、第6番目に「自分の時間がなくなってしまうか」(26.4%)、第7番目に「お金がかからないか」など、ボランティア活動をすることに伴う自分への負担への心配をしていることが分かった。また、上記の第1～第3番目の心配及び第6番目と第7番目の心配に関しては昨年と同じ順位であり、今年は4番目と5番目の項目が入れ替わっただけであり、ボランティア活動を始めようとするときに、本学生が抱く不安や心配は、上記のような一定の傾向があることがわかった。

【図9】 ボランティア活動を始めようとするときに主に心配なこと（複数回答）

総回答者数を100とする。



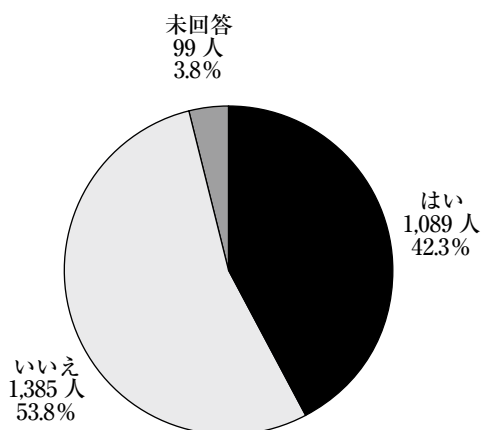
《自由記述》活動をはじめるときに心配なこと（主なもの）

資金面でサポート役がないことと、未成年の安全面（仏文）。自分の健康が損なわれないか（法律）。本当に人の為になっているか（政治）。自分の将来に役立つものになるか（国際）。

(5) 明治学院大学ボランティアセンターの認知

「明治学院大学にボランティアセンターがあることを知っていましたか」【図10】の質問に対して、「はい」と回答したのは42.3%、「いいえ」と回答したのは、53.8%である。「知っていた」という回答は、昨年より0.7%増加し、「知らない」と回答したのは2.3%減少し、ボランティアセンターの認知度が若干上がったことが分かった。

【図10】 明治学院大学にボランティアセンターがあることを知っていましたか。



4. 調査結果のまとめ

今回の調査結果から、2006年4月に入学してきた新入生の約31%が大学入学以前に自発的にボランティア活動に参加していることが分かった。大学時代にボランティア活動に参加したいと考えている学生は約60%であり、参加したい理由は「ものの考え方を広めたい」(56.4%)、「自分を成長させたい」(55.4%)、「授業では得られないものを学びたい」(36.1%)というような「自己実現型」が多く、「地域や人のために役立ちたい」(31.6%)という「問題解決型」を大きく上まわっていた。希望の活動日としては1位「長期休暇中に」(67%)、2位「休日」(21.8%)、3位「平日」(11.2%)にみられるように、休暇や休日を利用してボランティア活動に参加したいと考えており、ボランティア募集が一番多く寄せられる「平日」は、約1割強であり、学生の希望するボランティア活動のスタイルと寄せられるボランティア募集のニーズにはギャップがあることがわかった。活動の頻度は「期間を決めて」(40.1%)が多いものの、2位「月に1～2回」(31.2%)、3位「2ヶ月に1回」(21.1%) ボランティア活動を日常生活のなかで継続的におこなっていく意識をもっていること、週に1回活動をおこないたいとしている学生は、7.6%おり、また昨年(6.6%)だったのと比較すると1%上昇しボランティアに非常に積極的に取り組みたいと考えている学生は増加していることが分かった。活動内容としては「いろいろな活動に挑戦していきたい」が83.5%であるのに対して、「一つの活動を続けていきたい」は15.5%であり、内容の異なるボランティア活動に参加することで自己を成長させたいと考えていることが分かる。ボランティア活動に参加したくない理由として、第1の理由が「時間がない」(49.3%)であり、第2の理由である「関心がない」(34%)との間には開きがあり、学生がボランティア活動に参加したくない理由の過半数は、「関心がない」ためというよりも「時間がない」ためだと考えていることが分かった。第3の理由として「きっかけがない」があげられている。わずかではあるが2.7%の学生が「これまでの体験から」ボランティア活動に参加したくないと回答しており、大学入学前のボランティア活動経験によって、ボランティア活動に消極的になっていることが分かった。

「関心があるボランティア活動分野」については、昨年と全く同じ傾向が見られ、1番高い関心を集めているのが「国際」分野でのボランティア、とりわけ「異文化交流」と「国際協力」への関心が高いことが分かった。続いて「子ども」分野でのボランティアが挙げられ、「保育園・赤ちゃん」へのボランティアや「放課後活動」に高い関心が示されていた。3番目に高い関心が寄せられた「環境」分野ではこれを選択した半数近くの学生が「動物保護」に関心を持っていることが分かった。「文化」分野を選択した学生の約62%が音楽のボランティア活動に関心をもっており、「まちづくり」に関心を示した学生の約78%が「祭り・イベント」に関心を示し、また「心理」を選択した学生の72%がカウンセリングへ高い関心を示すなど、学生の興味、関心には一定の傾向があることが分かった。

また、さきに述べたように、芸術学科の学生は「文化」分野でのボランティア、心理学科の学生は「心理」分野でのボランティア、国際学科、英文学科、仏文学科、国際経営学科など海外の社会や文化に関

係のある学科では「国際」分野への関心が高いように、専攻する学科と関心のある活動分野には高い相関関係があることが分かった。

「ボランティア活動を始めようとするときに心配なこと」として、「自分にできるか」「相手とうまく接することができるか」「役に立てるか」「最後まで続けられるか」の項目が挙げられ、心配している主な内容は自分自身に対するものであることが分かった。ボランティア活動をおこないたい理由も「自己実現型」であることからわかるように、学生のボランティア活動への意識は、自分への関心や認識と非常に関係が深いことが分かった。

ボランティアセンターの認知度はわずかであるが高まり、新入生に本学ボランティアセンターの存在が年々周知されていることがわかった。

5. 調査結果の活用に向けて

本調査により新入生のボランティア意識と経験の一部を明らかにすることができた。今後は調査結果を踏まえて関心のあるボランティア活動分野、スタイルにこたえるようなプログラムづくりをおこなうこと、学生があげたボランティア活動への心配が軽減できるような環境の整備をおこなうなど、センターの運営を検討していく資料として活用していきたい。

本調査結果は現在ボランティア募集を希望する団体に向けて開催している「団体登録説明会」において紹介し、本学生のボランティア活動に関する意識と経験の実態を理解していただくのに役立っているが、今年度より本報告書データをボランティアセンターのホームページに掲載をおこない「新入生ボランティア活動アンケート」を広く閲覧できる環境を整備していくことがすでに決まっている。また日本学生支援機構の「学生支援情報データベース」に掲載するなど、大学生のボランティア関係の情報として広く活用されるような整備も引き続きおこなっていきたい。

(市川)

参考文献

平成 18 年 独立行政法人日本学生支援機構 『学生ボランティア活動に関する調査報告書』

在校生ボランティア調査の分析—アンケート調査とインタビュー調査の結果より

〈在校生アンケート調査の結果と分析〉

1. 調査の目的と枠組

ボランティアセンターでは2年前より在校生に対するボランティア体験アンケート調査をおこなっている。大学在学中のボランティア体験の目的やニーズを明らかにするためである。今年度も下記の要領でアンケート調査をおこなった。調査概要は次のとおりである。

調査対象：明治学院大学在校生（1年生～4年生）

調査方法：アンケート調査

調査実施日：2006年12月第一週・第二週

調査項目

- ・大学在学中のボランティア体験の有無
- ・関心のあるボランティア活動の分野
- ・ボランティアセンターの認知度 等

調査対象となる在校生については、昨年度まで3年次および4年次の学生のみを抽出し分析の対象としていたが、今年度は1年生から4年生までの在校生を対象とすることとした。アンケート調査に関しては、ボランティアセンター運営委員各位に協力していただき、特定の学部には偏らないサンプルを集められるよう配慮した。調査実施数の596の学部別内訳は次のとおりである。

文学部	60名	経済学部	105名	社会学部	155名		
法学部	111名	国際学部	63名	心理学部	79名	不明	23名

また学年別内訳は次のとおりである。

1年次	90名	2年次	158名		
3年次	198名	4年次	103名	その他・不明	47名

2. 調査の結果

大学入学後のボランティア活動の参加について尋ねた項目では、「現在している」と答えた学生が全学部で596名のうち76名（12.8%）、「したことがある」が164名（27.5%）、「したことがない」が356名（59.7%）だった。「現在している」と「したことがある」を合わせると、全学部の調査対象となった

学生のうちの4割にあたる240名(40.3%)が、大学在学中にボランティア活動を体験していることがわかる。次に、ボランティア活動を経験したことのある学生がどのような動機で参加したのかを尋ねた項目では、「自分でやりたいと思って」と答えた学生が187名(77.5%)、「誰かに言われて」と答えた学生が42名(17.9%)いた。また、大学在学中にボランティア活動を体験したことがあると答えた学生に対し、より詳細に参加の理由を尋ねた項目(複数回答可)については、上位から、「自分を成長させたい」(58.8%)、「ものの見方や考え方を広めたい」(55.4%)、「新しい体験や感動がほしい」(49.2%)と続き、「地域や人のために役立ちたい」(43.3%)、「授業で得られないものを学びたい」(43.3%)という理由が選ばれている。他方、大学在学中にボランティア活動を経験したことがないと回答した学生に、その理由を尋ねた項目(複数回答可)では、上位から「きっかけがない」(68.0%)と「時間がない」(53.9%)が大半を占め、次いで「情報がない」との回答が多くを占めたもののその割合は25.6%、また「関心がない」との回答についても20.5%にとどまっている。

また、関心のあるボランティア活動の分野(複数回答可)については、全学部でみると上位3位は、①「子ども(放課後活動、保育園・赤ちゃん、キャンプ等)」(15.0%)、②「文化(スポーツ、音楽、食、科学等)」(14.1%)、③「環境(森林保護、ゴミ・リサイクル等)」(14.0%)となっている。といっても、全学部の回答をみると、社会福祉(11.2%)やまちづくり(11.1%)、心理(8.8%)、NPO/NGO(7.9%)など、まんべんなく支持を集めている。

最後に、ボランティアセンターの認知度を調べる項目については、「ボランティアセンターがあることを知っている」学生が、調査対象学生のうち88.1%、「知らない」学生が10.9%と、在校生だけあってボランティアセンターの認知度は9割に近い数字となっている。ただし、ボランティアセンターの利用について尋ねる項目では、センターをよく利用する学生が回答数596のうち15名(2.5%)、利用したことがある学生が111名(18.4%)と低水準にとどまっている。さらに、コーディネーターや学生スタッフにボランティア活動に関する相談をしたことがある学生については、「よくある」「ある」と答えた学生を合わせて72名(12.1%)となっている。

3. 結果の分析

在校生にボランティア体験に関するアンケート調査をおこなったのは、今年で3回目である。2004年度におこなった在校生対象のアンケート調査は、全学部生に開かれた授業「ボランティアと市民社会」を履修していた1年生から4年生の165名が対象の調査だった。そのため、もともとボランティア活動に関心の高い学生が調査対象となっていたという特徴がある。また、2005年度におこなった在校生対象のアンケート調査は、2004年度と方法を変え、学部ごとに開講されている高年次生が多く履修していると思われる講義を選び、3、4年次生のみを抽出して分析対象とした。今回で3回目になる調査とはいえ、調査対象や調査方法がそれぞれ異なるので単純に比較をするのは難しい。それでも次のような

点を指摘することができる。

第一に、大学在学中のボランティア経験の有無についての結果である。今回の調査では、調査対象者の40.3%（240名）が、大学入学後に何らかのボランティア活動にたずさわったことがわかった。同じ調査項目について、2004年度は41.2%、2005年度は35.0%であった。2004年度の調査対象となった学生たちが、比較的ボランティア活動に対する関心が高い集団であったこと、また2005年度は大学在学期間が長い学生が多かったことなどを考慮すると、今回の調査結果で示された4割という数字は、決して低い水準ではないことがわかる。

第二に、ボランティア活動への参加を阻む要因についてである。大学在学中にボランティア活動を経験したことがない学生が回答した「きっかけがない」「時間がない」という要因は、2004年度の調査開始以来、不動の位置を占めている。ただし、2005年度まで多くの回答があった「情報がない」「関心がない」という回答は、予想されるほど多くはなく、2割台にとどまっていたのが今回の特徴である。ボランティアセンターの認知度についても、2004年度の80.3%と比べると、今回は88.1%という結果が出ている。これらのことから、ボランティアセンターの活動やVIS（明治学院大学ボランティア情報検索システム）を介したボランティア情報の提供について、在校生のあいだでも一定の認知が広がっていることがうかがえる。ボランティア活動をしたいと思いつつも情報がないために始められないという状態は、以前よりも緩和されつつあるのかもしれないⁱⁱ。

第三に、関心のある活動分野に対する回答の傾向である。今回の調査では、関心の高い順に①子ども、②文化、③環境であった。ただし複数回答可という条件のため、いずれも6割台の回答を得ており大差はない。2005年度の回答もこの三分野がやはりトップ3だったことを考えると、本学の学生の多くがこれらの分野に高い関心を寄せていることがあらためて確認された。

また、今回の調査でも、昨年に引き続き「ボランティアセンターに希望するサポート」として自由回答を記入してもらう欄を設けた。調査対象者596名から合計で71の自由回答を得た。

すでにセンターとして取り組んでいるものの、そのことが周知されていないと思われる回答には、「ボランティアについての相談コーナー」、「インターネットサービス」、「実際参加した人の体験記録や講演会があればもっと身近に感じられると思います」、「もう少し定期的に活動を知らせてほしい」といったものがあつた。相談業務については、コーディネーターだけではなく、白金の学生スタッフが今年度から自主的に始めた昼休みのパレットゾーンへの出張相談「ボラセンカフェ」が好評を得ている。インターネットサービスについても、2005年度からはVISのサービスを、また今年度からは登録制のメールマガジンを発行し、定期的にボランティア情報を更新し、届ける仕組みを作り上げた。また、体験記録についても、センターが主催したプログラムの参加者はそれぞれ報告会への参加と報告書の作成をおこなっている。横浜のボランティアセンターには、個人的に参加したプログラムに対する感想がひとつずつ見やすく掲示されている。

このようなすでに取り組んでいるサポート内容以外に、寄せられた希望には次のようなものがあった。

(1) ボランティア情報について

地域のボランティアセンターは利用しているが、大学のセンターは活用したことがないという学生は、「やはり、ボランティア活動をする上で、活動場所は家から近い所が良いので、地域別に色々ともっと選べると良いのではないかと思います」と記入している。また、「子供関係ボラの紹介を立川・日野地区でも！！ 私が住んでいるのが立川なので」という率直な回答もあった。また、「一人でも参加できるようなガイダンス」を希望した学生は、「“明学はボランティアが盛ん”とよく言われるが、これは本当だと思う。ただ、一部の人たちが熱心なだけで、全体に高い意識が浸透していないのは残念なので」と記している。

(2) ボランティアセンターとしての取り組みについて

また、ある程度、センターの活動を理解している学生からは、次のような具体的な提案があった。たとえば、「報酬制の導入（賃金もしくは卒業要件の単位として認める等）」といった単位化を望む声や「耳の聞こえない学生に対し、もっとサポートしてあげるべき！！」という意見、また、「もっと宣伝していいと思う。長期休暇前に募集している事は知っているけど、今まで、どんなことに取り組み、どんな成果を果たしているのか、また明学のボランティアに対する考え方・姿勢を伝えるべき。興味のない人を引き込むことこそ、役割だと思う」という、大学側の意図を学生に伝えてほしいという積極的な意見もあった。

(3) 学内ボランティア団体への支援について

ボランティアセンターとしても以前から行っている、学内のサークルや団体への支援についても期待されていることが確認された。「学内のボランティア団体の支援、後援、啓発」という回答や、「非公認団体へのサポート。ボランティアサークルの横のつながりの強化」を望む意見があった。さらに、「資金協力してもらえるチャンスや場を提供してほしい」「資金面の考慮」といった、すでに活動をしている個人や団体からの率直な意見もあった。

(4) その他

またセンターの活動をよく知っていると思われる学生からは、「今のボラセンで十分だと思います」、「ボランティアの種類ごとに分けて紹介されているし、情報が多いので利用しやすいです」といった肯定的な意見も寄せられた。

2004年度の自由回答と比べると、2004年度に散見されたボラセンに対する批判的な回答、たとえば「入りづらい」「何をしているのかわからない」「情報がわかりにくい」といった否定的な記述が少なくなっており、要望が個別化、具体化している傾向がある。とりわけ、大学としてボランティア活動をどのように考えているのかを、直接、学生に語りかけ、ボランティア情報を活用しやすいような内容に精査し開発していく仕事については、これからも地道に取り組む必要がある。アンケート調査を通して学生か

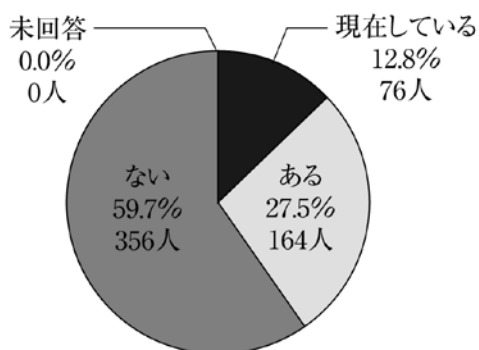
ら直接届けられたボランティアセンターに対する叱責や期待は、学生にとっての望ましいセンターのあり方を議論する上でたいへん重要である。

4. 調査の活用に向けて

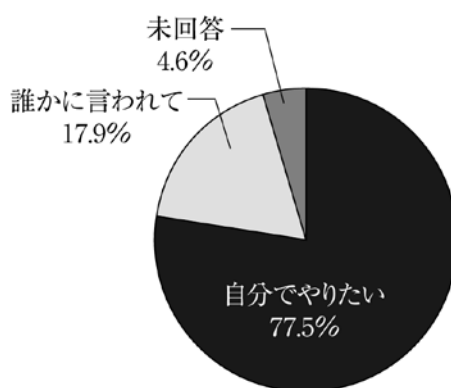
3回の在校生アンケートを経験し、本学の学生がセンターをどのように認知し期待しているのかがわかってきた。4割前後で推移している大学入学後のボランティア体験率を、どのように向上させていくことが可能か。この課題について、センターとして取り組む必要がある。また、「子ども」「文化」「環境」という3分野に関する情報収集については、特に力を注ぐ必要がある。と同時に、自由回答から寄せられたように、すでにおこなっている活動をさらに周知していくこと、また学内のボランティア団体やサークルへの支援や横のつながりを強化する方法などについて、さらに検討していくことが必要であることが明らかになった。

5. データ資料

【ボランティア活動の有無】

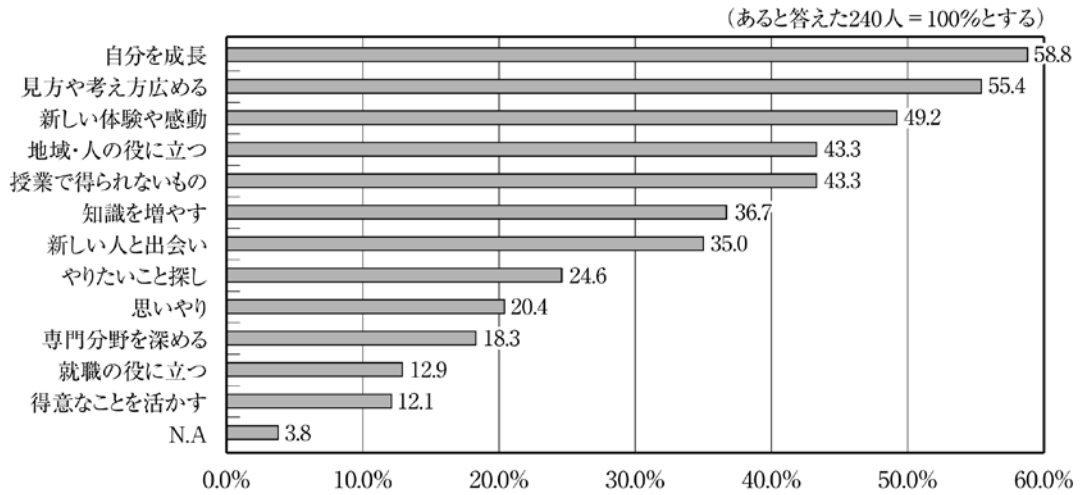


【参加動機】

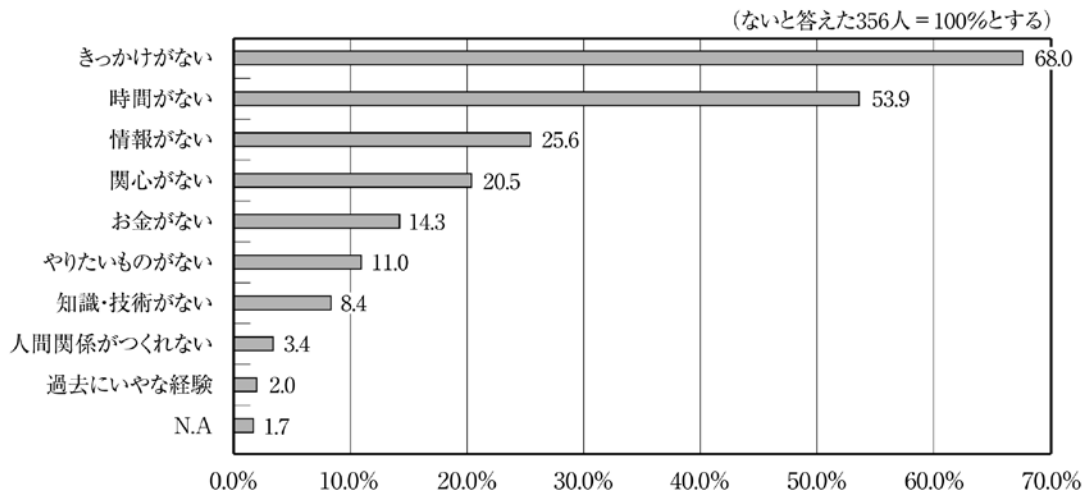


(あると答えた240人 = 100%とする)

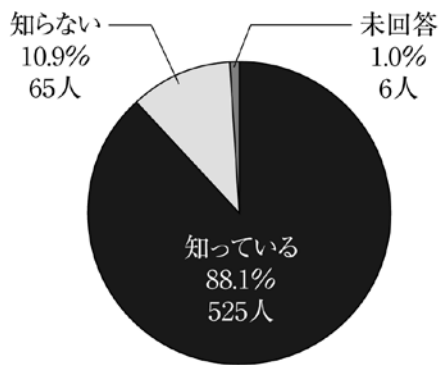
【参加の理由】



【したことがない理由】

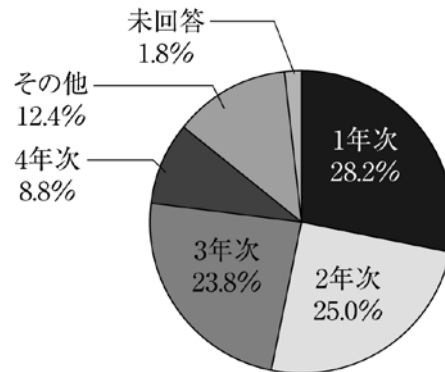


【ボランティアセンターがあること】



(回答数 = 100%とする)

【ボランティア活動参加時期】



(回答数 = 100%とする)

《在校生インタビュー調査の結果と分析》

1. 調査の目的と枠組

在校生に対する調査については、量的調査を2004年度から、また質的調査を2005年度から試みている。質的調査の導入に至った主な理由は、学生たちがボランティアセンターの活動をどのように評価しているのかについて、生の声を把握したいという動機による。量的調査からは、まだ全体の約6割と推察されるボランティア活動の経験のない学生や、何かを始めたいと思いつつも最初の一步を踏み出せないでいる学生に対する支援の必要性がまずは浮上する。しかしこの調査からだけでは、(少数かもしれないが)実際に大学在学中にボランティアセンターと関わりをもち、活動を経験した学生たちが、どのようにボランティアセンターの活動や自分のボランティア活動を理解しているのかについて知るの難しい。そこで、今年度も次のような枠組みでインタビューをおこなう質的調査を試みた。

調査対象：明治学院大学4年次生

調査方法：アンケート調査 インタビュー調査

調査実施日：2006年12月11日(水)～2007年1月22日(月)

調査項目

- ・ボランティア活動体験の有無
- ・卒業後の進路について
- ・ボランティアセンターについて

調査担当者：坂口緑

調査対象となる4年次生に関しては、学生スタッフ経験者を中心に、(a)大学在学中にボランティアセンターと関わりをもち、かつ(b)4年次生であることを条件に限定した。調査対象者の選択については、上の条件に当てはまる学生をボランティアコーディネーターに推薦してもらい、調査担当者が本人と個別に了解を得て、調査への協力を要請した。したがって、本調査の調査対象は、調査主催者側の意志が反映された作為的な選択によって限定されたグループであり、必ずしも本学の学生を代表するわけではない。

2. 調査の結果と分析

何よりもまず特記しなければならないのは、今回の調査が十分な準備と時間を用意できなかったため、当初予定していた調査協力者を得ることができなかったという点である。2005年度と同程度の数の協力者を獲得すべく、コーディネーターに推薦してもらった学生たちと個別に交渉を続けたものの、調査対象者の学生たちと調査担当者の予定が合致せず、インタビューに至らなかったケースが多かった。ま

た担当者からの度重なる調査依頼に警戒心を抱かれてしまったのか、連絡がとれないままになってしまった対象者もいた。協力を承諾してくれた学生たちについても、調査担当者側の都合による時間的制約のため、インタビューに要する時間を合わせるができない場合が多かった。結果として、インタビューに応じてくれた協力者がわずか2名、同時に依頼したアンケートに回答してくれた協力者が4名という、調査としてかたちをなさない結果となってしまった。この責任はひとえに調査担当者にある。

それでも、調査に協力してくれた学生たちからの回答はいずれも意義深く、重要であると考えられる。ここでは、限定された協力者たちの個人的な背景が必要以上に露呈しないよう留意しながら、わずかではあるがインタビュー調査の結果とアンケートによって得られた回答とを合わせて報告したい。

(1) ボランティアセンターとの出会い

今回のインタビュー調査の協力者となった少数の学生たちは、偶然かもしれないが、いずれもそれほど強い動機をもってボランティアセンターを訪れたわけではなかった。ある学生は友人に連れられて、また別の学生は「なんとなく」チラシを取りに行っている。大学入学以前のボランティア活動経験についても、「ない」と答え、また本学にボランティアセンターがあるという情報についても、入学前は「知らなかった」と答えている。それでも、友人と話をするためにセンターに立ち寄ったり、暇な時間にチラシを眺めたりしているうちに、はじめて、センターを介してボランティア活動に参加している。また別の学生は、第一志望で入学したわけではない本学での学生生活に魅力を見いだせず、友人関係も深入りしない程度にやりすごす納得のいかない日々を過ごしていたが、ある日、授業で配布された新潟中越地震の支援ボランティアのチラシを見て、初めてセンターに足を運んでいる。

協力者たちへのインタビューとアンケートからわかるのは、センターに一度足を踏み入れて、学生スタッフやコーディネーターと思いついて話をはじめると、次のステップにつながるという点である。ある学生は学生スタッフに登録し、その後、センターの中心メンバーとして活動を開始している。別の学生もセンターに集まる情報のなかで、これなら「楽しそうだしやってみようかな」と始めた子どもを対象としたボランティア活動を続けている。チラシに引き寄せられて新潟にボランティアに出かけた学生は、「張り切って」行ったものの、思っていたことの半分ほどしか「力になれなかった」という思いを残して帰京し、その後も障がいを持つ子どもの余暇支援やノートテイクボランティアなど、いくつもの分野を経験し、現在も活動を継続している。

調査協力を承諾してくれた学生たちは、すべて実際にボランティアセンターと関わりを持っている学生たちなので当然の結果ではあるものの、実際に足を運んでもらえるかどうかはその後の活動に影響する。また、学生たちは必ずしもボランティア情報のみを求めてセンターに来室するわけでもないことが推察される。そしてボランティア募集の「チラシ」という古典的な情報提供の方法が依然として大学内では効果的であるということもわかった。

(2) ボランティア活動体験

ボランティア活動を経験するなかで、学生たちはその経験をどのように理解しているのかについても尋ねた。学生スタッフだった協力者は、学生たちがボランティア活動をできるだけ始めやすいように企画を練り、中間支援のプログラムを実施してきた経験をもつ。この経験から、「ボランティアは無理してやるものではないし、ひとりでやろうとするとハードルが高くなる」と話している。だからこそ「誰かと一緒に」始められるプログラムが重要だし、その手応えを感じているという。また、時間の許す限り多様なボランティア活動を経験してきた別の協力者は、ボランティアは「年齢に関係なく多様な人と出会えるのが魅力」と話す。以前は、自分から壁をつくっていて、周囲の人すべてが退屈な人間に見え、「見下していた」けれども、ボランティア活動を通して得た友人とまた別の活動に参加するなど、交友関係が広がったと話す。またその活動のひとつを通して出会った知的障がいをもつ子どもや、その子を支える家族、友人、そして屈託なく一緒に遊び回る同じ学生ボランティアの仲間達を見て、「子どもが好きだと初めて自分で感じた」という。それは、結果的に自分の「成長」を実感させ、今は「会う人、会う人、みんな、尊敬している」というくらいに、人間に対する魅力を感じるようになったと話す。

ボランティア活動に対する自己理解については、活動経験のある人ひとりひとりが異なるストーリーを紡ぐことができ、ひとつの方向にまとめることは難しい。けれども、自分の経験をどのように活かすことができるのかを客観的に考える態度に、在学中にボランティア活動を経験することの意味が、限定された協力者たちの語りのなかからも十分に感じられる。

(3) 進路について

今回の調査でも進路について尋ねた。これは、大学在学中にボランティア活動を経験した学生が、自分の生き方やライフスタイルの選択も含めた進路選択にどのような関連性を見いだしているのかを明らかにしたいというねらいがある。

たとえば、学生スタッフとして活動した経験をもつ協力者は、ミーティングでの意見集約や対立する意見への対応などを経験し、「ボランティア活動の内容というよりも、集団内での考え方が身に付いたと思う」と話している。それは直接には、就職活動で何度も試されるグループディスカッションに役立つというが、それ以上に、自分と異なる意見の持ち主を理解しようという姿勢につながっているという。また別の協力者は、ボランティア活動を続けながら就職活動をすると、最初は利益を得る活動をしている企業が「悪者にみえてしかたがなく困った」と話す。しかしそれでも面接を受け続けるうちに、環境や社会貢献について意識の高い企業を見分けられるようになり、また面接官を通してそれが企業の宣伝文句なのかそれとも企業全体で取り組んでいる活動なのかもわかるようになったと話す。

今回、インタビューやアンケートに回答してくれた学生たちは、偶然にも全員が企業で働く進路を選択しているⁱⁱⁱ。けれども、就職したのちも「何らかのかたちでボランティア活動を続けたい」という明快な意志を示している。理由は「気晴らしとして必要」「今の活動を続けたい」「横のつながりが魅力」「出

会いがある」など様々ではあるが、卒業してからも自分の活動の一環として続けることを前提にライフプランを思い描いていることがうかがわれる。アンケートに答えてくれた協力者からは、次のような回答があった。「意識的に続けていくという、硬い決意があるわけではない。ただ自分の中で、ボランティアを通じて人とコミュニケーションしたり、隣の人が困っていたら手助けする、そんな精神が身にしみているので、自然にこれからも不定期にはなるかもしれないが、続けていくんだろうなと思います」。「自然にこれからも」という言葉に、学生生活のなかでボランティア活動に取り組んだからこそ得られる、肩の力が抜けた感覚を見いだすことができる。

(4) ボランティアセンターについて

今回のインタビューとアンケートでは合わせて、ボランティアセンターに対する要望についても自由に回答してもらった。協力者となってくれた学生の多くが学生スタッフだったという背景からか、ボランティアセンターそのものに対する要望よりも、学生スタッフの在り方に対する、たとえば「1年から4年までの全学生スタッフのある程度の組織化、連帯感を持ってほしい」という先輩らしいコメントも寄せられた。また、ボランティアセンターを十分に活用したという意識からか、「要望というよりも、むしろ自分にとっては感謝することが多い」という肯定的な意見も聞かれた^{iv}。ただし、具体的な提案として提出された意見のなかには、次のような注文もあった。

- ・ 海外ボランティアプログラムの国内版があればいい。センターのスタッフと地方などに泊まりがけで出かけてボランティア活動を体験する方法があれば、卒業後も継続的に取り組むことができる。
- ・ 海外ボランティアプログラムには参加したかったが費用を工面できず断念した。
- ・ 大学内でセンターの活動を認知してもらえるよう、「ボランティアセンター通信」と「活動報告書」の中間的な広報誌があるといい。あるいは両者のいずれかを改良して発行するといいかもかもしれない。
- ・ ボランティアセンターが主催するようなワークショップをおこなうといいのでは。学生スタッフだけではなく、学内のボランティア関連団体が参加できるような、リーダー研修のようなかたちのワークショップがあれば出てみたい。

卒業後の進路を見据えた4年生らしく、大学生という立場から一歩離れた、ひとりの個人として、大学に期待する活動を提案してくれている。

3. まとめ

ボランティアセンターに関わりをもったきっかけを詳しく聞いてみると、友人に誘われて訪れた、友人が学生スタッフだったからという答えが返ってくる。では、何らかの「つながり」をもたない学生は在学中ずっと来室しないのかということと必ずしもそういうわけではなく、授業時に配布されるチラシを通して、ボランティアセンターについての活動やプログラムを知り、思い切って訪れてみたという学生もいた。学生たちに対しては、はじめてボランティアセンターを訪れるきっかけづくりが必要であること

が改めて確認されると同時に、プログラムを企画立案し、チラシを配るという地道な広報活動もやはり重要であることが明らかになった。

また、国内の、宿泊を伴うボランティア活動プログラムへの参加意欲が高いことも確認された。新潟中越地震のような災害ボランティアに参加した学生の場合、何もできなかったという反省が次の行動に結びついていると説明してくれた。活動先が国内であれば、在学中は継続的に、また卒業後もなんらかの形で関わるということが可能になるという指摘も重要である。

入学した学生に対し、在学中に一度でもボランティアセンターに足を運んでもらうこと、そしてボランティア活動への参加を呼びかけること、一度、参加した学生が次の経験へつなげることができるよう支援すること。残念ながら不首尾に終わった今回の在校生インタビュー調査ではあるが、今回のインタビューとアンケートからは、学生のニーズに合わせた個別の支援を継続していくことの重要性があらためて明らかになった。

(坂口)

i アンケート調査に関するすべてのデータ集計およびグラフ作成は山下剛史氏が担当した。

ii ただし、ボランティアセンターに必要なサポートについて尋ねた自由解答欄には、「認知度が低い(個人的に)」、「具体的に何をしているかがわかりません」という回答も少数あった。

iii 商社、芸能プロダクション、外食産業など。

iv 「もっとたくさんの学生にボランティアセンターの活動を知ってほしい」「学生スタッフ以外の学生が、もっとボランティアセンターに関わってほしい」「ボランティア活動のことをみんなに知ってもらいたい」というコメントもあった。